

『け心の昔』と『正風誹談録』：俳書管見(二)・付 翻刻『正風誹談録』

大内, 初夫
鹿児島大学教養部教授

<https://doi.org/10.15017/10496>

出版情報：文献探究. 11, pp.1-13, 1983-03-15. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：



『けふの昔』と『正風誹談録』

俳書管見(二)・付翻刻『正風誹談録』

大内初夫

元禄後年に刊行された数多くの九州俳書の中で、すぐれた内容を持ち、高い評価を得ているのは朱拙編『けふの昔』であろう。元禄十二年に京の井筒屋勝兵衛から上梓された本集は、諸名家の発句を収録するのみならず、芭蕉の「十八樓の記」や「閉關の説」の俳文や芭蕉一座の「あれ／＼て」歌仙を収めており、更に十六項にわたる朱拙の俳論がまじえられていて、内容は多彩なものである。そしてそれゆえに、野田別天樓氏は本集を「当時の撰集中一頭地を抜くものがある」と高く評価している。

じっさい本集は、そのすぐれた内容のために、後年その大半に『寒菊隨筆』(享保四年刊)巻頭の芭蕉・野坡両吟連句を加えて、『初便』と改題して『俳諧七部拾遺』の中に収められているし、またその俳論は、既白著『蕉門むかし語』(明和二年刊)や梨一著『もとの清水』(天明元年刊)などにも引用掲出されており、後代にかなり影響するところがあったように考えられる。

ところで、ここで言及したいのは、それとは別に、『けふの昔』と馬耳の伝書『正風誹談録』との関係についてである。攬叟軒馬耳については詳しいことを知らないが、名古屋の月空庵澤露川の門弟であり、陸奥桑折の人である。『國曲集』によると、正徳三年露川が同地方に行脚した折、これに対面し師礼をとるに至った俳人らし

い。年代が明確ではないが、享保年中に馬耳は筑紫行脚に來遊しており、その折地方の俳人に伝授したものがこの『正風誹談録』である。

本伝書は、いまだ紹介されたことを聞かないので、次に書誌的なことについて若干ふれておきたい。『正風誹談録』の写本で管見に入ったものに次の二本がある。

- (1) 九州大学支子文庫本
- (2) 本庄弘直氏所蔵本

(1)は横本一冊。表紙共紙で題名の記載はない。墨付十七丁。内題「正風誹談録」。印は巻初に「文庫」、巻末は「技」の朱印があり、共に旧蔵者田村專一郎先生のものである。写者並びに書写年時は不明であるが、享保と延享頃か。

(2)は序文と本文は別に綴じられ、半紙本二。序文共紙表紙中央に「正風誹談録」、左下に「秀山」とある。本文の方は二十二丁。共紙表紙左端に「發句教」と記している。写者は共に本庄家の祖秀山である。秀山は、野坡の高弟塩足市山の長男で、塩足宇七郎清俊といい、室永七年の出生で、天明六年三月没、享年七十七歳。書写年時は不明である。

(1)(2)の相違については、後出の翻刻文によって明らかなく、それれ若干の脱字・脱文や誤写を有しているが、本文にそれほど極端な異同は見られず、お互いかなり近い原本によって写したものであろうと見られる。本書の内容の詳細については翻刻文を掲げていることなのでここではふれない。

さて、本書を一読して特に注目されるのは『けふの昔』との関係である。次にそれらの箇所を並記してみよう。

(『誹談録』)

○ むかしある人連歌師の宗長につけ句はいかゝするかよきにや
聞れ侍れば長の日上手の連歌ハ
他人の中よきかことし表向は遠
けれ共下心よくつるにおのつか
ら句ひあり下手ハ親類の中惡し
に、たり表向はしたしけれ共
下心よからずとかや申されしよ
しありかたきおしへなり芭蕉翁
のつけられしは他人の中よき
とや申へき

○ 夫誹諸ハ日々夜々^(E) 流行すれ
ハ此境を工夫すへし此ミちの大
祖ながら宗鑑貞徳をいまの世に
用ひかたき流行の異なれハなり

(『けふの昔』)

○ 或人宗長に付句はいかゝし侍
るかよしやと問ひたるに上手の
連誦は他人の中よきことく表向
はとをけれとも下心よく付てを
のつからの句ひあり下手のは親
類の中わるきに似たり表向はし
たしけれとも下心よからずと申
されしとき、しこそめてたき教
へなれはせを菴の付られしは他
人の中よしとやいはむ

………宗鑑貞徳は此道の祖な
れともいまの世に用ひかたきは

誰かする往年の是ハ今年の非と
なり今年の非は來年の是となら
ん事を春は秋にあらすきのふハ
けふになし

○ 凡詞ハ旧可用情以新^(爲) 先と

は定家卿の示し給ひぬ山谷は換
骨奪胎の法を立たるに誰か傳へ
しはいかいは平語の新しみを本
意にしてあなかち古人の詞を用
すと蕉翁の艶言舞妓の荒唐俚語
俗詞ならねは誹諧ならずと此筋
の魔境に落入るもの多し元より
此道ハ俗によつて真趣を樂しむ
事なれはいつれを是としいつれ
を非とせんしかもひたふるた、
にのミかゝわらざる詞新しくと
も情致ハ古ひぬへし……

○ 凡句は練るを惡しといふへか
らすとせ^(五) はせを翁ミノ斜嶺

流行の異れはなり來者の芭蕉菴
を見む事も又しかならむ誰かし
る往年の是は今年の非となり今
年の非は來年の是とならむ事を
春は秋にあらすきのふはけふの
昔なり

○ 詞以旧可用情以新爲^(爲) 先定家卿
はしめしたまひ山谷は換骨奪胎
の法を立たるに誰かつたえし俳
諧は平話のあたらしみを本意に
してあなかち古人のことはをも
ちひすと芭蕉菴の示されしとて
窮巷僻地には傾冶の詭言舞妓の
荒唐俚語俗詞ならねは誹諧なら
すと此筋の魔境におちいるもの
多しもとより此道は俗によつて
真趣をたのしむ事なれはいつれ
をか是としいつれをか非とせん
しかもひたふる古へにのみ拘ら
は詞あたらしくとも情致はふる
ひぬへし

○ いつの比にかありけんミノ斜
嶺亭にまして

亭にして

もらぬほとけふは時雨よ草の屋根

火をうつ音に冬の鶯

一年の仕事は麦におさまりて

まことや此才三八十余句ほとせ

させ給ひて(其)のちあまり座の

しめりたるは興なしとてこの句

をすへられたるとかやしかれハ

おろそかならぬ事なり……

○ 賈嶋は推敲の二字になやミ西

行ハ風になひくの五文字につか

れたまふといへり……

○ 澄月や海にむかへは七小町

欲把西湖比西子

淡粧濃抹也相宜

といへる東坡が作例ならん

○ 名人の古事をとりにたるハ古人

の力をからすして句中無尺のひ

きあり此境中分迄にて刻鵠類

鶯といへるにもあらざるへし

もらぬほとけふは時雨よ草の屋根 斜傾

火をうつ音に冬の鶯 如行

一年の仕事は麦におさまりて 芭蕉

まことや此才三を十余句ほとせ

られて後座かしめりたりとて此

句に決せられたりと其連聚のか

たるをきゝぬ

○ 賈嶋は推敲の二字になやみ圓

位上人は風に靡くの五字につか

れ給ふとぞ

○ 明月や海にむかへは七小町

とし玉ふを………此句

は欲把西湖比西子 淡粧濃抹也

相宜 といへる東坡が作例によ

られたるへきを草くに看過さむ

は本意なし

○ 名人の古事をとりにたるは古人

の力をからすして句中無盡のひ

きあり此境中人分上のにらみ

たらはことく先人の唾余に

して刻鵠類鶯といへるにもあら

○ 凡他の句を看ん事字眼を案へ

し

あつみ山や吹浦かけて夕涼

といふ句ハ吹の字にあたりて夕

すミとせられたると見ゆれ世

に福の字なんとに書て發句と思

へるハいと口おし、陶淵明か詩

の神にして千古の名あるは秋菊

有佳色といふ佳の字なりと關し

○ 散る花 南無阿彌た佛と夕かな

其角か曰 辭世と出しぬれ

とも神職の正統として守武なん

そ此境をにらみ侍らん只落花に

対してア、と一時のなけきなら

んといへりさもありぬへし

○ 梅か香にのつと日の出る暑かな

此句余寒の題なるよし句中寒の

字なけれ共長夏にも寒かるへし

これや影畧の法とはいふへき杜

甫か菊霞の題にて

暫時雪載花

幾處葉沈波

さるへし

○ 句を看ん事字眼を要すへし

あつみ山や吹浦懸て夕す、み

といふは吹の字にあたりて夕す

、みとはせられたりと見えたる

を世に福の字を書なとして發句

とおもへる口惜と或人のいへり

さあるへし陶淵明か詩の神にし

て千古の名あるは秋菊有佳色と

いふ佳の一字なりときゝし

○ ちる花をなむあみた佛といふかな

晋其角曰荷今集に辭世と出した

れと神職の正統として此境をに

らまれまし只落花に對して嗚呼

と一時の歎ならむとさまあるへ

し

○ 梅か、にのつと日の出る山路かな

此句余寒の題なるよし句中寒の

字はなけれと長夏にも寒かるへ

しこれらをや影畧の法とはいふ

へき杜甫葉霞の題にて

暫時雪載花

幾處葉沈波

林和清が梅の詩に

横斜疎影水淺深

暗香浮動月黃昏

右の兩作見へし菊蔭といわすと梅といわすして吟勢それとたしかなり是影畧の法也

林和清が梅の詩に

横斜疎影水淺深

暗香浮動月黃昏

兼葭といはず梅といはねとも吟勢それとたしかなり是影畧の法なり

右のように対照してみると明らかのごとく、『けふの昔』所収俳論の多くが『正風誹談録』中に利用されているのである。それも『蕉門むかし語』のごとく、同じく『けふの昔』を引用しても、『詞以旧可用、情以新爲先と定家卿は示し給ひ、山谷は換骨奪胎の法を立たるに……』とふるき人の語りしが」とか、『地獄天堂は學人の心なるべしとつくいの朱拙が書置しもさる事にぞ』とか、典拠がいくらかはつきりするような形で行なっているのではなく、明らかに剽窃と見られるような形での利用である。『正風誹談録』の馬耳の自序によると、月空庵露川の説に燕鏡の俳諧を加え、更に正風好士の物語したことを添え書きしたということになるのであろうが、それにしても『けふの昔』の利用が大々的でありすぎるように思われる。行脚俳諧師が地方をめぐる場合、伝書はその収入の面で重要な役割りを担うものであつたろう。しかもそれが、宗匠と地方俳人との私的な関係の上で伝授がなされるものであるから、俳諧についての高い見識や専門知識に乏しい宗匠にとって、自己の權威づけとして、このような他作の剽窃による伝書の作製は、ままた行なわれたの

ではなからうか。この『正風誹談録』はそうしたこと考えさせる伝書であるので、あえてここに取りあげた。なお、『けふの昔』以外にも恐らく他作の剽窃があるのであろうと考えられるので、次に全文を翻刻しておく。終りに本庄弘直氏並びに九州大学附属図書館に謝意を表します。

翻刻 正風誹談録

馬耳著

凡例

- (1) 底本には支子文庫本を用い、本庄氏所蔵本と対校した。
- (2) 底本の欠字は・で示し、対校本のそれは×で示した。
- (3) 対校本との異同は括弧して傍記した。
- (4) 底本をなるべく忠実に翻刻するよう心がけたが、仮名は現行の字体を用いるようにした。

正風誹談録

(古しき)
古より誹諧ありといへとも世に盛ならさり
しに山崎の宗鑑荒木田守武など史記
滑稽傳によりてはいかにもつき行れ

しよりそのち難波の宋囚出ていよ／＼一轉
狂言不實の句の虚にはしり侍る其後

芭蕉翁出たまぬ始て古今集の誹諧

正風躰の骨髓あらわれ侍る 再昌院

季吟にて誹談あり酬和 湖春 素堂

はせを翁なりとかや正風躰の句・直・侍るハ

枯枝に鳥のとまりけり籠の暮

これよりして蕉翁へ季吟の傳ます／＼

熟せりとして當流は顯れ侍るとかやうけ

給りぬ

正風大祖風羅翁はせを居士滅後二十余年

の間異風國へ流行して正道の斷續すへ

きをなけて尾の月空居士國々を經廻り

尙東の風雅おほつかなしとて蚤蚊の呵

責も恐れす遙／＼と此國へ杖を引給・し折

から攬翠軒に頭陀をおろして正道の

謬義にこぎ各異風邪氣の衣を脱て專

正風執行の功ならん事をいのるといへとも

元より愚智矇昧のやからなれハ闇夜に

礫して寢鳥をうつかことししかあれば

今年(今)のけふは勢陽の燕説納誹諧遺立

の大願を起して一院を退き去し年ハ

月空居士の平包をたすけてしら・ひの

築紫迄かけあるき悉く正道の諸法に

うなつかせて制戒に及し門人千有余と

かやいまた三越路の風雅もゆかしと籠田

坂田を経て北國に趣むとこの里に來ら

れしを居士のゆかりと聞はなつかしく

當運のたれ／＼つとひ集り誹の輿儀を

探ルにその行のすみやかなる事流砂の流を

欺きそのあかる・事右月の海底を覗・より・

明し茶話夜會の度毎におもしろきこと

くさ筆をたのミたる反故共を集めてまた

是に正風好士の物語せし事を添書して是を

一帖となし名つけて誹談録と呼なり

籠耳のやつかかなれば三子川を渡るの

たくひもありなんかしし・れとも他の

ためにせされハ後見の人ゆるさせ給へや

享保三戌孟春日

攬翠軒馬耳

一それ發句といふものは虚實無一の處より

一物を起し一部の巻頭なれハ其趣向尤

向上たるへしオ一切字を肝要と心得へし

切字といふは一句の余情の籠る處問答

差別して趣向の關ゆるやうにすへし

切字のなきは位なふして發句にあらず

發句は平句より十段くらゐの高きをもつ

てけり其もの／＼本情を見と、けて新

古をわかち是を發句の魂として切字

のはたらきをもつてわつか十七字の

無尽の余情を含蓄するを十段の趣向

とはいふへし

一當流正風・誹諧八十段半の處に居て遊と

心得へしたとへハ梅を喰ふて乾・の

止ムハ勿論にして理屈たるへし 又梅を

見て乾・の止むハ其次也梅の嘯に

乾を止るを以是等を十段とはいふへし

みな是古ミなり正風の變化ハそれより

半段立のほりて理屈をはなれてしかも

其梅より綱をつけて梅の本情をはな

れず諸題の難を工夫すへし

一風姿風情あり風情今古不易柳ハ柔

和に牡丹ハ富貴なる菊の隱逸なるミナ

情也

一風姿は其一段上にして富貴隱逸の

すかたを見出すを云せ柳のしとけな

きに十八九の女を寄るは情なり姿ハ今

日其人のおかしき取なりの日々流行する

處を見出して一作あるへし 誹諧は常の俗語にして一曲をつけるをよしとするなり理より出て新(く)・くせんとおもふは此道の了簡違ひの人にして至極の古ミなり是新しく我と我手に理を付るゆへに外人の耳にいらす是を誹談(く)・行過とも十一段ともいふて聞へぬ句多かるへしよくく十段より半段を風雅の大綱をつけて姿にわたるへし姿の上にて句に新古ハ分別(く)なるへし 口傳

一 正風躰の發句はすかたを七分情を三分を心得へし情は理の發(く)にして不易に近しかるかゆへ情を先にする時多くハ古ミに落ぬ日と變化して日々に新也たとへハ四時に春夏秋冬と押うつりて一日も同じさまならぬかことし風雅も其變化のすかたに眼をつけて山川草木鳥けたものに至(く)・まで一日くとうつりけるすかたを見出すへし是流行とハいふ也しかれ共彼不易の本情大綱のしまりなけければ虚言にはしり實なしました

實に落入れば古ミに落勿論といふ句のミ成へし虚言の間に一曲を立て句

37

作るへし是正風の當流とハいふ也 一 誹諧は連歌の詞をやすらかに云ひたるものとこゝろへたる人多しさにハあらず哥ハうた誹は誹なり元來別くの物也何ほと詞あらけたり共趣向哥ならは誹諧とは成かたし誹諧といふものハ詩連哥に云れぬ處を拾ひあけて此一道を立るものと心得へした今日この俗語のつたなきを以て本意とすしかれとも其意味のつたなきハ風雅ならず言葉・いやしきを用いて意味はやさし、風雅を專・ニすへきもの也

風姿の句 瓜むいたやうに寢ころふ火煙哉 圃友
風情の句 景清とあまへてかゝる火煙哉 燕説
右兩句に・味しるへし

人情 おれにいわしや先君か代の千の春 季吟
菰を着て誰いいます花の春 是せを
右兩句かんかふへしその人情季吟ハ疎おもき情を述たりはせを遊人の情を述給ふ句に本情を專とす

古池や蛙飛込む水の音 是せを
翁の仰ける此古池の五文字をのけて外の

41

五文字もあらはずへ候へとなり 足音に 風雪
山吹や 其角
兩人おもひくんの五文字をすへて 翁うち笑ひ給ひて嵐雪が足音の五文字・勿論の事也 其角が山吹やの五文字・山吹の情富貴なるものにしてにきやかなれば吹うつらず予か古池やと置しは甚淋しき情を一はいに述たりとの給ひし・かや風雅なくてハあるへからず

さつさくとおとる節季候
かやうの句きほひはかりに・て風雅なし是を風雅にせん・ならは
梁齒に嵐のさつさ節季候
かやうにして風雅なり尤七段の句たるへし
また爰に一句を見する也
朝夕に嫁と姑の小鬮諍
はせを仰けるは全風雅なしとて小・さかひを月に雲と御直しの由
句の廣きを手柄とす・也
宿札に假名つけしたる門柱 其角
翁仰けるは假名付したる門はしらとは
其身見立の趣向にして誰も云出すへしし

42

かれはせはし

宿札にかな付したも問れ顔

かやうにして其句ひろししたも問れ顔と

したるゆへに借宅などのものは是非問れ

にかりての事と聞へ侍りてよきやと仰れしと

句をつける事分別あるへき事也一とせ翁

行脚の折から難波の一席にて

前句

伯父の名をまんまと貫ふ貞精者 諷竹

師走の月に海はたの家

靑流

凝魚ねさする大年の雲

酒堂

翁もかしらかたむけてこれにやハと

小袖を出して着たる大年

翁

右・三句ながら心ハひとつものにして良圓

神用金石のたがひめおよふへきにあら

す爰に正風の付句を見する

貫之か梅津かつらの花もみち

むかしの子あり忍・せておく

咽かかハかは爰に梅干・

山の名を大雲とりに小雲とり

蓬萊や岩に墓を打親父たち

日もなかひものところゝする音

世の中はミナ剃刀の上ぬめり

あゝと答て代脉にたつ

凡句をするには遊字・なきやうに心かけへし

わつか十七・字のうち一字も無益の字

ありてハ無念の事也此句にて分別

すへし

しかなく信濃のぞむ信玄

繪といふかありて百里も鼻の先

月空申されしハさる事ながらありてといふ

假名遊ひ侍るかやうならハしかるへしとて

繪といふて已に百里も鼻の先

かやうにて遊ひ字の侍るへき也

むかしある人連歌師の宗長につけ句ハいかゝ

するかよきにや・問れ侍れば長の日上手の

連歌ハ他人の中よきかことし表向は遠

けれ共下心よくつゐにおのつから句ひあり

下手ハ親類の中惡し・にたり表向は

したしけれ共下心よからすとかや申され

しよしありかたきおしへなり芭蕉翁の

つけられしは他人の中よきとや申へき

夫誹諧ハ日々夜々・流行すれハ此境を工夫

すへし此ミちの大粗ながら宗鑑貞徳を

いまの世に用ひかたき・流行の異なれハ妙

なり誰かする往年の是ハ今年の非と

なり今年の非は來年の是とならん事

を春は秋にあらずきのふハけふになし

凡詞ハ以旧可用情以新・先とは定家卿

の示し給ひぬ山谷は換骨奪胎の法

を立たるに誰か傳へし

はいかいハ平語の新しみを本意にしてあな

かち古人の詞を用すと蕉翁の艶言

舞妓の荒唐語俗詞ならねは誹諧

ならずと・此筋の魔境に落へるもの多し

元より此道ハ俗によつて真趣を樂しむ

事なればいつれを是としいつれを非とせん

しかもひたふるたゝにのミかゝわらざる詞新

しくとも情致ハ古ひぬへし

句を作るの分別工夫すへし

利口・古身

火うち音に萩の花散る

にせもの

火うち出せば萩の花散る

當流に・は

火うち袋に萩の花散る

此句にて分別すへし前の兩句ハ退て當

流の句は火うちて花のちるやらんまたは

火うち・袋かさわりて散ぬらんいろく

きかるゝなりしかかは片よらすして其句
大にひろし

凡句は練るを惡しといふへからす一とせはせを
斜領亭にして

もらぬほとけふは時雨よ草の屋根

火をうつ音に冬の驚

一年の仕事は麦におさまりて

まことや此才三八十余句ほとせさせ給ひ

てののちあまり座のしめりたるは興なし

とてこの句をすへられたるとかやしかハ

おろやかならぬ事なり今此の俳人

五分線香三分せんかうなとにて句を

作はやくきをよしとする

凡句は五文字よく起して中文字五文字と

つらねて句となれりオ一其起す處の

五文字分別處也

茶の湯の文や若楓

此句の五文字掛ものはと言類句なりしに

翁仰けるは五文字ありぬへしとて

屏風に・腰はり

見せに來る 折ふしに

かやうに置いて見て末の五文字に決し給ぬ

折ふしに茶の湯の文や若楓

177

賈嶋は推敲の二字になやミ

西行ハ風になひくの五文字につかれたまふといへり

定家卿はいつも哥の五文字をのちにのミ

すへ給ぬとかやみそし一文字のうちにてさへ

かくのことしわつか十七文字のうちなハ至極

無益ならぬやうに心かけへき也

折ふせて垣に結る、梅の花

これらの五文字益なしたとへなくとも垣に

結る、梅の花にて開へたり此五文字をの

けて外ニいくつもおくときにおかれ侍る

尤無益の事なり

おほつかなき事ともなり

趣向といふハ無尽なり瀆の真砂と云しも

むへなるかな悉く眼を配り気をつけ

ぬハ古哥古詩も轉んし・至極の句と成

事多し 爰に蕉風の句をならふ

ほととぎす鳴や五月のあやめ草

ほととぎす鳴や五月のあやめ草

あやめもしらぬ戀をするかな

此歌の上の句をとりにて五月の月の字尺の

字に直して甚誹なり句也妙成かな

鷹一つ見付て嬉しいらこ崎

ほし一つ見付たる夜の嬉しさハ

178

月にもまさる五月雨のそら

はつ時雨猿も小箆をほしけなり

篠まけて花弓張おのわらハ

類鳥帽子のほしけ也けり

澄月や海にむかへは七小町

欲把西湖比西子

淡粧濃抹也相宜

といへる東破か作例ならん

名人の古事をとりにたるハ古人の力をからすして

句中無尽のひゝきあり此境中人分迄にて

刻鵠類鶩といへるにもあらざるへし

凡他の句を看ん事字眼を案へし

あつミ山や吹浦かけて夕涼

といふ句ハ吹の字にあたりて夕涼とせられたる

と見ゆれ世に福の字なんとに書て發句と

思へるハいと口おし、

陶淵明か詩の神にして千古の名あるハ

秋菊有佳色といふ佳の字なりと聞し

散る花・南無阿彌た佛と文かな

其角か曰に辭世と出しぬれとも

神職の正統として守武なんぞ此境を

にらミ待らん只落花に對してアゝと一時

のなけきならんといへりさもありぬへし

179

197

梅か香にのつと日の出る暑かな(歳)

此句余寒の題なるよし句中寒の字

なけれ共長夏にも寒かるへしこれや影暮の

法とはいふへき 杜甫か菊霞の題にて

暫時雪載花

幾處葉沈波

杯和清か梅の詩に

横斜疎影水淺深

暗香浮動月黄昏(兼)

右の兩作見へし菊霞といわすと梅と

いわすして吟勢それとたしかなり

是影暮の法也

ひゞきの句

行春を近江の人とおしミけり

降らすとも竹植る日ハサのと笠

紫纒畑やきのふ死んたる猫の塚

青柳の龍頭にとまる鳥かな

霧に風をむすふ句

朝霧のあちらに竹のあらしかな 月空(自)

此句にてしるへし(日授)

發句を見・るに切ぬ句世間に澤山なりその

わけをしらぬ人はいかさまに傳授のあり

ての事たるへし恐れてこれを是と思へり

口おしき事也 切字に甚子細ある事
にてしれる人ならて知るへからず

捨假名に和らきそめて梅の花

おされては人の肩ゆく御迂宮

繼母の白ひ顔よりきしの聲

磯の月海士の子なれやかくれんほ(心)

右へとり左へつかふけふの菊

出代にあかめわかれも候ひき(蓋子)

なからへて今さら恥をたねなす(蓋子)

庭曠く蠅啼ておかしかり

青嵐ならふ蘇鐵の常盤なり(心)

立て舞ふ上戸の貝に散る櫻

浪人のたとへ喰ても冬の梅

今も尙袈裟か氣相に春の雲

曰粽にほきて青すたれ

三國の約ははつれやけふの月

右の外限りあるへからすおの至極なりけらし

尾の月空居士攪變軒に息給し折から

一連衆問て曰誹諧のさし合くるへき

事御傘或はなひ草およびおた巻よせ

書鷺水か大全等をもつて吟味すると

いへとも月うつり星へたてぬれば古書(まじ)

に七句去とあるも當流に三句とし又ハ

三句去とあるも付合にせしの類以多し
是等のくらき事其師にしたかはねはし

れる事なく一生誹諧のくらきに迷ふて

道をしらす居士連中のために此迷ひを

明して明きに引つきぬへき一枝をあた

へたまへ(給)

居士ほ々突て尤なり宗鑑貞徳よりの

式目ありながらそのうち好士達人なと

蕉翁の吟味さらくにして是ハ是とし

非を非と定たり尙師につかへて甚

功ならずはこのさハき分明に成まし

しかれともころろミ・問へ余りそれに准す(準)

ぬへき

問 星月夜として嵐雪其角等月に用すこれハいかん

侍るや童蒙・手引の誹書におの正月に用たり

答 やはり正・月にしてくるしかとす併名所の星月夜

ならぬやうに氣をづけられ候へ

問 梅は春の季なり雪は春もふり侍る雪の梅とし

侍らハいつれの季になり侍らんや(行)

答 梅も春雪も春ながら降れとも四季に分るハ雪月花

と賞翫重し此重・にひかれテ冬の句にたるへしだ句の

作によるへし

問 人倫等のわけ古書に人りんになるとらぬと部を

立てあり或は和尚の法印の代官の座當のなど、
して人倫にならぬさたあり是へくるしからぬや
答 人倫の事ハむかしより部分置侍れとおのく人倫に
よりての和尚或・代官なれば古人の控薫門に可也
とせず幾度も遠慮すへし是等にかまらず

月次の月 正月より十二月迄の
此月次に・明或二日の三日の十五・廿日などの類・つ

けても打越てもくるしからず

子細は天象の間さへ二句去也是ハ人によりての
詞なれハかまひなく外ハ是に准すへし
日ニ幾日の類三句去へし

しかしきのふけふと言ては同字にならず
依てつてよししかれとも昨日今日明日と

いは、三句去なり外ハこれに准すへし
同字三句去といへとも別吟ハかまふ事なし
口授のことしたとへハ

御の字七句去也

しかしし御門と言ハ御の字なから三句去
なり子細ハ帝とも云ゆへ也外この格也

不と不 同字ならず
しかれとも付句・遠慮すへしうち越かまひ
なしやはり子尔葉なり

不でがなどの事子尔葉なれとも嫌る
事ハ外の假名よりは耳たちて聞ゆる
かゆへなり外是になやらへ

月次の影として正の月に用たり國曲集
のわき句を見るへし

問 不審紙傳受に光る湖月抄
連哥の席に照る吐月峯

答 おの合點なき事なりかな是邪非のいふ所成へし
用る事なかれ殊更宵闇といふ事八月の出ぬ中
へに宵闇なりしかれ八月いまたなし雲にかくれ

雨にかくれたりと月の出てあらは月や宵闇ハ
一向月なし
世に邪非蟻のことに群りておのれか管見にも
いろの了簡をして是蕉門の口決なんと
言り多くの人を迷ハす油断すへからず

問 はせを翁のつけ給ぬと言傳へ侍る
是等のいふかし

答 これらの句今時の人のなんぞすへきその
葦の居る笹のしの屋と詠しけり

翁の心にならずはしれぬと知へし蝦を
喰ふたる祖師佛を焼たる丹霞の類ひ
にして今こ・ろの是悲云ふにたるへからず尚口授

問 同字別吟の事は亦口授のことし
し文字に三世ありといへともそのうちに兩通して
まさらハしきも侍る是等の見やうはいか・侍らんや

答 左方曰 咽にかよふしハ切る
舌に通ふしハ不切
大やう夕に通ふし文字ハきらぬと知へし
見て居れハ夕日に咲し藤の花
今朝散し跡や淋しき藤の花
この兩句夕にかよふなり
松高し夕日に咲る藤の花
これ夕・通ふ事なしイキに通ふゆへさる也

音通の事大切の事にて侍る吉凶ハこれ
によるへしいにしへの連哥とて見侍るに
雪なからやま元霞むむかな
ゆく水遠く梅匂ふ里
川風に一村柳色見えて
いにしへはかやうにて悉才三・音通見へたり

豊前國松浦聖廟奉納十句
神法樂
松風の匂ふ扉や濱の宮

色あさやかに御手洗の蓮

むつかしき顔は家老に備りて

古賢東鑑

頼朝かけふの軍や名取川 右大將頼朝

みちのくやすむら退治の時・此句をなし給ぬ

茂るとも羽柴は松の下木かな 家康公

此御句ハ尾州長峯御合戦の時なされし也此句

調伏の句とて通音のさたなし敗北して討死す也

依 大権現うち勝せ給ひ秀吉公ともに

都へめてたくかへらせ給ぬ

時々今天・下しる五月かな

此句・明智日向守むぼんの心さし右大臣信長公を

うち牽らはやと思ひ愛宕山にのほりて連哥し

侍りぬしかれとも右の句習のたらぬ處の侍りて

山崎合戦の時に終に身に報ひ・たりぬ

紀貫之の句

親句疎句ははしきと和哥の大事也よく可秘也

外下略

ほの／＼となちの外山に來・鳴也

しましかたらへねくら定めん

凡席に望みて句を案しぬへき事幾度

轉してもいかぬ趣向ハ捨へしくりかえし

エまんとすれハその情うすくなれる事多し

一とせ居士東行の折から攬翠軒にての興行・
し給ぬ一卷爰にしるし畢ぬ

白川の種風見たり青あらし

時宜して通る旅の早苗開

四五間ハ龍骨車のはね飛付て

龍骨車の思ひ付よろし併才三の

句作に今少不足なればとて御直し

龍骨車を大エまさりに作る覽

掃除寄麗にほしもの・庭

ほしもの・庭といふ所今少有へし庭と

いわすとも

掃除寄麗にけふ・干物

月見むと検見手代の御に出る

此句風雅なし

月の雲手紙の奥をよミ残し

鎌に飛つく虫のやさしき

此句手からもなく・ゆるし

薄刃に飛んで虫の大ちやく

猫の子の提緒にさる・菊畑

この處男ハ悪しとや前句女と見る也

依てさけをしかるへからす

婿もまた大振袖の裾の露

それ來る鞆を僕かけて見る

前句女の句・この句よからす僕うるさし

それ來る鞆を此方てけて見る

世を渡る諸業もあるに桶の栞

この句あまり真すくにして一句風・なし

諸業と云すともしかるへし

・桶の輪竹をとり散し

りんきいさかい鍋釜の疵

この句つねにして風雅なしいく度もやす

らか成へし

・また空風の怪気いさかひ

下紐の解てハ猫のと・められ

句作たらすもつ・も猫無益なり只下紐

はかりにてよし

下紐のむすふ間もなき年の浪

時斗ハいままた鐘かふる聲

拙の髭ぬき仕廻ふ玄關番

・趣向よししかれともぬき仕廻ふてハ

面白からすとて

拙を髭にぬき出す玄關番

守をおとすをもつて木守

冬近くひつやりと成る手構

裕ひとつて律義六助

小謡も折にふれてハ花心

野菜分限と見ゆる若竹^(冊)

右のことく一句の直し奇なる事也^(尋)

此巻爰にしるしぬる事後着のため^(看)

なり

凡付かた八躰の事合點しなからひと

いふ句うつろひと云句にも紛しき事侍る

その境の見へぬ事愚昧なればなり口おし

八躰の付かたの聞覺ぬるを筆まかせ^(照見)

爰にならふ

奥から順にとほす燈臺

アテ 貝桶につくきぬ張玉くしけ

峠を越すは送られた馬

移地 杏杉に間に花を見せかけて

天気よし野々川の瀬か鳴^(る)

ヤリつく鐘の供養の施主ハ誰しややら

月星の悴をきみに奉り

ヨセ すぐり立たる露の篠竹

高欄に明石の御方はつあらし

穉海棠のたよくと咲く^(目せ)

發句の奇句

雲芥の死を聞て

わるひ夢あふ夜ハ暑し花さくら

・(無詠)

167

168

かたき奇・來る村松^(巻)の聲

走リ 晨明のないうち鳥帽子着たりけり

かたなきす身を見れハひつくり

其闇さくらさ師走の事なれは

鎌ひとつ草刈ふこにはなれ牛

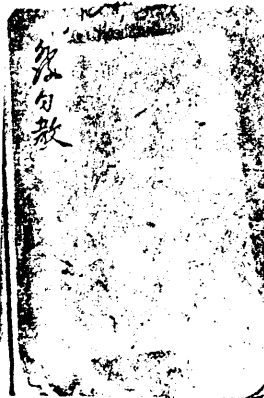
天狗の颯ミ行に必定^(目)

宿替の車長持引かけて

さても暑やと川へ飛込ム

鹿兒島大学教授

171



手大梅屋... 此の巻は... 凡の事... 此の巻は... 凡の事... 此の巻は... 凡の事...

正風誹詠録

清野

市ノ湖濱りくとも一毎春を希るはて
山深く多徳重中田ちみれど史記
滑石をゆかりてまゝいふまゝをほにりも
しものちゆ波のふ因ゆりりく時
我言を實れちの意不くしゆゆれは
芭蕉のむかひ非非と古今集に湖濱
正風誹詠は宵観かこれれ 舟鳥院
香吹く湖濱あり 湖濱 湖赤未堂
とせぬれりしと正風誹のゆゆれ
杜牧の鳥いゆりり 籬のそむ
市ノ湖濱りくとも一毎春を希るはて
山深く多徳重中田ちみれど史記
滑石をゆかりてまゝいふまゝをほにりも
しものちゆ波のふ因ゆりりく時
我言を實れちの意不くしゆゆれは
芭蕉のむかひ非非と古今集に湖濱
正風誹詠は宵観かこれれ 舟鳥院
香吹く湖濱あり 湖濱 湖赤未堂
とせぬれりしと正風誹のゆゆれ
杜牧の鳥いゆりり 籬のそむ
市ノ湖濱りくとも一毎春を希るはて
山深く多徳重中田ちみれど史記
滑石をゆかりてまゝいふまゝをほにりも
しものちゆ波のふ因ゆりりく時
我言を實れちの意不くしゆゆれは
芭蕉のむかひ非非と古今集に湖濱
正風誹詠は宵観かこれれ 舟鳥院
香吹く湖濱あり 湖濱 湖赤未堂
とせぬれりしと正風誹のゆゆれ
杜牧の鳥いゆりり 籬のそむ

九州大学支子文庫本序文

正風誹詠録

秀六

下ノ市ノ湖濱りくとも一毎春を希るはて
山深く多徳重中田ちみれど史記
滑石をゆかりてまゝいふまゝをほにりも
しものちゆ波のふ因ゆりりく時
我言を實れちの意不くしゆゆれは
芭蕉のむかひ非非と古今集に湖濱
正風誹詠は宵観かこれれ 舟鳥院
香吹く湖濱あり 湖濱 湖赤未堂
とせぬれりしと正風誹のゆゆれ
杜牧の鳥いゆりり 籬のそむ
市ノ湖濱りくとも一毎春を希るはて
山深く多徳重中田ちみれど史記
滑石をゆかりてまゝいふまゝをほにりも
しものちゆ波のふ因ゆりりく時
我言を實れちの意不くしゆゆれは
芭蕉のむかひ非非と古今集に湖濱
正風誹詠は宵観かこれれ 舟鳥院
香吹く湖濱あり 湖濱 湖赤未堂
とせぬれりしと正風誹のゆゆれ
杜牧の鳥いゆりり 籬のそむ

本庄弘直氏所蔵本第一冊表紙・序文